

都中英研だより

第 52 号

東京都中学校英語教育研究会
会 長 備里川 正人
(足立区立第六中学校)

確かな手応え、中英研ワークショップ!

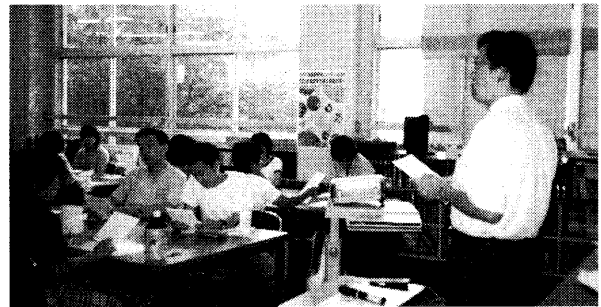
事業部のサマーワークショップは、今年で9年目を迎えた。今年度は8月17日(木)に文京区立第一中学校を会場として行われた。このワークショップは、英語教育に関する専門的知識と理論的実践を習得することをねらいとしている。「理論に裏づけられた実践力を身につけることで、2学期から授業ですぐに使える指導方法を」がキャッチフレーズである。

今年度は、松本茂先生(立教大学経営学部国際経営学科教授)、久保野雅史先生(筑波大学附属駒場中・高等学校)のお二人に講師をお願いした。

松本先生のワークショップは、「ディベートができるようになるための指導の在り方」と題して、午前中に行われた。初めに松本先生は、現在の学校現場における英語教育の問題点の一つとして、最終的にどんな生徒を育てたいのか、が明確になっていないことを挙げられた。教師一人ひとりが「育てたい生徒像」を考え、その最終目標に向かって創造的な授業をしていくことが大切だと訴えられた。

ディベートは到達目標の一つとして挙げられる。英語を習って3年足らずの生徒たちがディベートをすることは難しいと思われがちであるが、そうではないと強調された。ディベートでは、自分の役割と発言内容が明確であるので、準備と指導を周到にすることで、中学生でも議論を楽しむことが容易なのである。

後半にはディベートを楽しむための準備として、様々な指導法を、実演を交えて紹介して下さった。参加者はグループを作り、生徒役になってディベートを楽しんだ。給食の是か非かを題材として行われた討議は各グループ白熱した。



久保野先生のワークショップは、「生徒をひきつける授業・評価の工夫 スピーキング力の育成とテストの改善—音読・暗唱を核にして生徒を鍛える—」と題して、午後に行われた。久保野先生はまず、到達目標の明確化を訴えられた。これは松本先生と同じである。また、英語の習得は日常的な訓練の結果であり、その訓練は部活動などで試合に向かって練習に励むことにより備えることができる、とお話された。

一度習ったことをそのままにせず、身に付くまで「鍛え」ていくための、様々な方法を教えて下さった。鍛えるための方法は、音読と暗唱の2本柱になっている。音読に関しては、以下の方法が紹介された。文法問題では、解いて答え合わせをして終わりではなく、正解を全員が確実に発音できるようにしてから書かせると、日常の思考へより近い方法での指導が効果的である。また、音読の指導においては、CDよりも教師が肉声でモデルを示し、どこが上手なのかを考えさせたり、同じ文でも場面によってストレスが変わることを感じ取らせたりすることを強調された。そうすることで、学習者の意識は本文の内容へ向き、日常の思考へと近づくことができるからだ。

暗唱では、段階を追って生徒の負担を軽くし、「自然に覚えてしまった」と感じさせるようなワークシートの工夫を紹介された。参加者は生徒役になり例文の暗唱に取り組んだ。

参加した先生方は、お二人の講師の先生方から2学期の授業への種々のヒントを得て、エネルギーを充電できたのではないだろうか。(事業部)

楽しく活気あふれる研究部夏期語い指導ワークショップ

1. はじめに

研究部主催の夏期語い指導ワークショップは、今年で5年目を迎えた。今年受講者は延べ91名で、若手の先生方の参加も増え、熱気あふれる中で行われた。語い指導について、研究部員が各校における日頃の実践を紹介し、受講者に体験していただきながら意見交換を行った。

2. 日程と会場

第1回 8月2日(水)品川区立小中一貫校日野学園、

第2回 8月3日(木)狛江市立狛江第一中学校、

第3回 8月22日(火)江東区立第二南砂中学校。

3. ワークショップの内容

今年は教科書改訂の年で、授業での語い指導中心のワークショップを行った。

(1) 第1回：8月2日(水)

・岡崎伸一教諭(品川区立小中一貫校日野学園)

①過去4年間の研究部の語いの研究の紹介、②中学3年間における学習レベルにあわせた4種類のオリジナルBINGOの紹介、③英語のリズムの活用方法等を紹介された。

・北原延晃教諭(狛江市立狛江第一中学校)

中学校における辞書指導について自学自習の学習方法を紹介された。また60秒クイズ、90秒クイズなど生徒を集中させて関心を高める指導方法なども紹介された。

(2) 第2回 8月3日(木)

・石井 亨教諭(江東区立第二南砂中学校)

①Vocabulary workで既習の動詞の復習、②対話文でのListening, Speaking, Reporting練習、③Writing notebook を活用したWriting指導、④自作BINGOの指導方法などが紹介された。

・関口 智教諭(葛飾区立常盤中学校)

一年生へのPhonics指導、Picture cardsの使い方、ネームカードの作成方法、絵を用いてのreproduction指導の方法など、絵やジェスチャーを交えた楽しい指導方法が紹介された。

・鶴田峰子教諭(中央区立銀座中学校)

①入門期の指導を中心に、外来語からスピーチ指導への手順の紹介、②前置詞やカテゴリー別語い習得のワークシート紹介、③教科書理解のワークシートの作成方法等が紹介された。

(3) 8月22日(火)

・溪内 明教諭(大田区立東調布中学校)

教科書本文の新出語句の定着のための活動としてOral Introduction, Explanation, Flash cards、音読指導の方法を紹介された。目的に応じたワークシートの作成方法についても紹介された。

・原田博子教諭(江東区立深川第一中学校)

英語の歌を聞き取りペア競争、単語探しゲームなどで活用する方法を紹介された。また、ゲームやペアワークを通じて、新出語いの定着のための活動をいろいろ紹介された。

・花田佐和子(杉並区立和田中学校)

生徒の発表活動の指導実践例として、生徒の発表をもとにしたシェアリング・プリントの作成や授業でフィードバック、外国人講師との連携指導などが紹介された。

4. 受講者の声

- ・635語の語いリストを有効利用したい。
- ・研究部の活動が地道でありながら、明日の授業を変えるきっかけとなる有益なものだと知った。
- ・辞書の使い方について再考させられた。
- ・生徒になりきって充実したワークショップだった。たくさんのヒントを得た。

5. 研究部研究発表および公開授業

本年度の研究発表は、2月23日(木)に府中市立第二中学校で行う。同校の田口徹教諭に公開授業をしていただく予定。

6. 研究部員募集

研究部では一緒に語い指導を研究をする部員を募集中です。研究会は毎月1回実施。

(文責：中央区立銀座中学校 鶴田峰子)

平成18年度 英語教員集中研修について

東京都教職員研修センター 研修部授業力向上課 指導主事 松永 透

平成18年度の英語教員集中研修を8月7日～11日、8月21日～25日に実施した。
今年度は中学校教員対象の3年目となり、414名の中学校英語科の先生方が受講した。
5日間（30時間）全10単位の研修プログラムは以下の通りである。

	午 前	午 後
1日目	・オリエンテーション ・コミュニケーション（演習）	・リスニング（演習）
2日目	・リーディング（演習）	・スピーキング（演習）
3日目	・ライティング（演習）	・ディスカッション（演習）
4日目	・プレゼンテーション（演習）	・授業実践交流（協議） ・マイクロティーチング（演習・協議）
5日目	・異校種間実践交流（協議） ・マイクロティーチング（演習・協議）	・マイクロティーチング（演習・協議）

本研修の目的は生徒の実践的コミュニケーション能力を育てる授業改善である。TOEFL（PBT）550点以上、TOEIC730点以上等のスコアや英語実用技能検定準一級以上を取得している先生方は申請することで、4日目午後からの受講とすることができる。研修では4技能の具体的な指導の在り方についてを中心の組み立てとなっている。目的達成のためには全10講座の受講をおすすめする。本研修は平成19年度で終了するが、未受講の先生方は来年度には必修受講となる。今年度の実施結果を踏まえ、研修の一層の充実に務めていきたい。

Why are We Teaching English?

Since the introduction of the new Course of Study in 2002, the landscape of English Teaching in Japan has changed greatly. Some may say that Japanese society, too, as well as the students who come to class every day have changed as well. Some JTEs may say “everything’s fine” while others mutter “nothing could be worse” and to explain the manifold reasons or manifestations of these changes is a job for History. However, all English Teachers involved in teaching public school English must consider the basic question “Why are we teaching English?” This answer should be divided into two parts: First, teaching English is a way of engaging the students basic Humanity, and fostering the ability to think, learn, judge, and take action on their own and through harmonious action with other students and teachers in class. Notice that this is the primary goal. Secondly, attaining a level of scholastic ability in English by focusing on communicative (not cramming) activities that allows each student to develop their own sense of uniqueness with a positive attitude and high motivation to use English should be a major goal of all classroom English teaching. When these two parts are combined into a method or approach that allows the students to foster and develop their own learning, then that JTE, or that school, is reaching towards the goals and targets that were introduced in the new Course of Study. The challenge of meeting these types of goals and targets shows its results in the most important of ways: the development of students of good character, as the personality and traits developed in school will follow each student long after a JTE’s English lesson is over.

Brian McDonough, MSc.

Manager, Curriculum Development Dept., INTERAC CO., LTD.

授業力を高める「東京教師道場」とは？

1 はじめに

今年度から「東京教師道場」という新たな研修プロジェクトが始まった。都の重点施策の一つだということだ。マスコミでも報道され、全国的に注目されている。また「東京教師道場」に触発されて全国各地で同様の授業力向上のための研修が開講され始めている。ところが、一般の教員には「東京教師道場」が何を狙って何をしているのかよくわからない、と言われる。そこでこの紙面でささやかながらご説明をする次第である。

2 性格

これまであった研究員や開発委員（東京の教育21）を統合する形で授業力アップに特化した研修としてスタートした。

3 部員

道場だから門下生という立場になろうか。本研修では部員という名称を使う。指名は校長の推薦に基づき、区市町村教育委員会が推薦した教員が対象。資格要件としては①教職経験が10年程度②校長が「授業力」向上のためのリーダーとして育成した教員③高い専門性を身に付けようとする教員である。

4 助言者

指名は部員の項に同じ。資格要件としては①東京教師道場で部員として修了（2年間）した教員②校内等で若手育成の実績のある教員③専門性が高い教員である。

5 指導体制（以下は英語に限って述べる）

都指導主事、教授（退職校長等）、助言者、部員からなる。

最小単位は助言者1名部員4名のグループ。これが中学では4グループ、高校でも4グループ存在する。通常は2つのグループが合体して「班」として研修を行う。（グループ単独もあり）また年に数回は中高の8グループが一同に介して「組」として研修を行う。研修期間は2年間である。本年度の中学英語の助言者は以下の通りである。田口徹教諭（府中二中）、本多敏幸教諭（深川八中）、北原延晃教諭（狛江一中）、相沢秀和教諭（昭島市立瑞雲中）。

6 研修の流れ

2年を3期にわけてそれぞれテーマを決めて授業改善に取り組む。

第1期 把握・点検期（1年目8月まで）

自己の授業力を把握し、授業改善のPDCAサイクルを確立する段階。

第2期 発展・充実期（1年目9月～2年目7月）

授業力を飛躍的に向上させるため、徹底的に研鑽を積む段階。

第3期 自立・完成期（2年目8月～）

指導的立場の教員としての能力を確立する段階。

7 研修回数

毎月1回研究授業をして研究協議を持つ。会場は部員の学校。今年度の例で言うと中高一緒の「組」が1回、「班」が5回、「グループ」が3回である。また夏季休業中に2回終日にわたって研修があった。1回は「組」でもう1回は「班」であった。

研修協議会ではかなり厳しい意見も出される。よりよい授業創造のためにはお互いに妥協しない。自分のこれまでの授業や研修を突き詰めて考えさせられる。もちろん事前に指導案を提出し、助言者から細かい指摘を受ける。数度の改訂を経て研究授業に臨むわけである。

8 研修内容

現在のところ第1期を終えた段階である。部員はこれまでに行った研究授業やマイクロ・ティーチングについてかなり深く考えさせられた。正直言ってタフでないとならぬかもしれない。しかし、授業改善は直接生徒にはねかえる。生徒の笑顔が増えるのを楽しみに部員は日々の研鑽を積んでいるのである。

最後に一言。よく練られた研修ではあるが、たった2年間で授業がうまくなるわけではない。教師道場の他にさまざまな官民の研修会に参加したり、本を読んだりして常に理論と実践のバランスを図っていかないといけないだろう。

東京教師道場助言者 北原延晃（狛江第一中学校）

◇出版部より

本年度も授業研究を中心に実践的な活動報告の特集を企画しています。日常の授業に役立つ先生方のちょっとした工夫をぜひ出版部までご紹介ください。

連絡先：東久留米市立東中学校 井田宗宏（Tel&Fax 042-472-7995）